

「信じる心」

7月の下旬に結婚式の司式をしました。以前に働いていた教会の青年で、私が洗礼式(キリスト教徒になるための儀式)の司式をした人の結婚式です。会場が教会ではなく結婚式場でしたので、いささか勝手の違う所もありましたが、オーシャン・ビューのロケーションでの結婚式でした。実は私は、前々日に39度近い熱を出して寝込んでしまい、果たして司式が出来るだろうかと心配になったのですが、病院で出してくれた特効薬だという最新型の抗生剤と解熱剤を服用しながら何とか役目を果たしました。

当日の朝は、雨が激しく降っていたのですが、式が始まる屋ごろにはすっかり雨が止み日差しが眩しく照り輝く中で式は行われました。引き続き披露宴にも出席したのですが、何人かのスピーチの中で、「天気急回復したのは、新郎新婦の普段の行いが良かったからだ」といった趣旨のことが語られました。

その時、私は、「違うだろそれは！」と思いました。「神がこの結婚式を祝福してくださって雨が止み、太陽が照り輝いたのだ」と心の中の声が叫んでいました。でも、1か月ほど経って冷静に考えてみると、人それぞれの受け取り方があるのだと思えるようになりました。結婚式と披露宴の時間だけ雨が止んで日が差していても(ちなみに披露宴の後は再び雨でした)、それを人徳だと考える人もいれば、神のお蔭だと感謝する人もいて良いのです。もしキリスト教徒でない人も多くいたであろう披露宴の席で、万が一、私が急に立ち上がって「これは神の恵みによるのだ！」などと大声で主張したとしても、場の雰囲気をおち壊しただけでしょう。「全くキリスト教徒はKYだ！」と嫌がられて終わりです。「そうか神のお蔭か」などと自分の考えを変える人はいなかったことでしょう。

さらに、私の熱が何とか下がって司式の務めを果たすことができたことも、単に医者や薬のお蔭だと考える人もいるでしょう。でも、適切な診断と投薬の判断をしてくれた医者のおかげで、神が働いてくださったと考えることも可能なのです。

このように、何事でも、神とは無関係に物事を受け取ることも、神との密接な関係の中で物事を受け取ることも可能な訳です。その中で、自分の選択として神を信じ、折々の導きに感謝しているのだということを自覚することが大切であるように思います。この自覚が無いと、自分の信仰を人に押し付け、他人が大切にしているものを踏みにじることにもなるのではないかと自戒を込めて思うのです。

「愛がなければ、無に等しい。」(新約聖書コリントの信徒への手紙一 13章2節)